

(別紙 2)

審査の結果の要旨

氏名 本田 貴久

20世紀前半のフランス文学で独自の地位を占める作家ミシェル・レリス(1901-90)は、シュルレアリストとしての前衛活動、ダカール=ジブチ・アフリカ横断調査団(1931-33)に参加した人類学者、『成熟の年齢』(1939)、『ゲームの規則』(1948-1976)などの自伝的作品の作者と、多彩な顔を持っている。本論文は、この多面的な活動の根底に「編集」という一貫した態度が見られることを指摘するものである。新聞記事をハサミで切り取り、シャッフルして貼り合わせるダダの作詩法、民族誌に学んだカード記録法、日記や下書きのカードの文章を書き換えることで生みだされる自伝と、どの分野でも用いられた「編集」という手法に着目することで、この作家の活動を一貫した視点から捕らえることを可能としたことは、本論文の鮮やかな功績である。

では、レリスにとって「編集」とは何だったのか。本論文は二部で構成され、まず第一部で、幼い頃の収集癖から、それが作家としての方法となるまでの過程を筆者はたどり、次にレリスが自覚的な方法として用いた「編集」という概念を定義する。第二部では、その作業が実際にどのように行われたかを、『ゲームの規則』を中心に（特に死に関わる文章が次々に繰り出される第二巻『フルビ』、他の巻と違って断章形式を取る第四巻『微かな音』）、いくつかの箇所にて具体的に分析する。「編集」という概念は、レリスの場合、すでに書かれた文章の組合せに限定されず、文字、単語、文という三つの水準でなされていることを筆者は確認する。内面から言葉を振りしぼるのではなく、すでに存在する言葉に物理的に働きかけることによって何かを創りだしてゆくこと——この「編集」的操作を徹底してゆくことによって、レリスが言葉を、たとえそれが自分の発した言葉であっても自らの所有物ではなく他者のものとみなすに至ったと筆者は主張する。レリスが前衛から人類学、自伝にいたる多方面で活躍できたのは、筆者によれば、すでに存在する言葉を出発点としてある思考や精神状態を創出しようとする、この「編集」技術への偏愛があったためである。

さらに重要なことは、この作業がレリスにとっては、単なる遊戯にとどまらず、時間によって左右されない絶対的なものを象徴する「詩」に到達するための手段だったことである。「真の心の叫び」に到達するためにはある種の技術が必要なのであり、しかもその技術が「詩」を根源的に到達不可能なものとして指し示すという点で、レリスの「編集」技法には文学がはらむ根本的なパラドックスが露呈していることを筆者は明らかにした。

審査では、「編集」概念の定義の甘さ、取りあげる事例の少なさ、レリスを「編集」へと向かわせた動機の分析が不十分であることなど、いくつかの問題点が指摘された。しかし、この作家の活動全体を俯瞰する視点を、先行研究には存在しない独自の角度から提示し、展開した業績は見事であり、審査委員会は本論文が博士（文学）の学位にふさわしいものと判断する。